

SONRISA

そんりさ

vol. 161



コロンビア革命軍の最後

FARC 集合地に掲げられた3種の旗(左から、FARC、コロンビア国旗、平和の白旗)

02	コロンビア革命軍の最後	…………柴田大輔
06	サンティアゴ・アティトラン―バリアフリー目指す「虐殺」のまち	…………藤井 満
09	メキシコ、先住民統治議会創設と女性広報官の大統領候補登録	…………小林致広
12	書籍紹介 『マラス―暴力に支配される少年たち』	…………工藤律子
14	ラ米百景 『革命の侍』映画化余話	…………伊高浩昭
15	ペルー音楽 イルマ・オスノ「タキ：アヤクーチヨ」を聴く	…………水口良樹
17	メキシコの食「ニンジンとキャベツとハウレンソウのスープ」	……ミゲル・アクーニャ
18	ムネちゃんのLA情報拾い読み・斜め読み	…………小林致広

2017年7月15日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

2016年11月、反政府ゲリラ・コロンビア革命軍（以降、FARC）と政府の和平合意が国会で承認され、52年に及ぶ内戦が終結することになった。国内26ヶ所の集合地に集結していた7,000人余りのFARC構成員の武装解除は、今年6月26日に完了した。

コロンビア南西部のアンデス山中に位置するカウカ県。特にナサ民族ら先住民族が多く暮らす同県北部にカルドノ市がある。同地ではこれまでに多くの男女がFARCに入隊してきた。今回、集合地が置かれた場所の一つともなったカルドノや、北部カウカ県のこれまでの歩みと、和平合意後の様子から、住民とFARCの関係を見ていきたい。

1. 武器を置くこと

「もうコロンビア人同士で殺し合わなくていいんだ」FARC兵士リチェルが言う。現在36歳の彼は入隊していた2人の兄の後を追ひ、19歳でFARC兵士となった。貧しい先住民族集落で生まれた彼の周囲では、「世の中を変えたい」という思いを持つ若者が数多くゲリラへ入った。彼も若者が持つ情熱の行き場をゲリラ活動へ向けた。以来、17年が過ぎた。何度も経験した政府軍との戦闘で多くの仲間が死に、彼自身も人の命を奪ってきた。戦闘だけではない「汚い仕事」もあったと話す兵士がいる。自分自身の存在意義でもあったゲリラ兵士としての姿と、武器を置くことで感じる安堵感の狭間で、彼の気持ちは揺らいでいるようだった。

2. 農村に浸透するFARC

私がリチェルと出会ったのは2016年3月。当初、和平合意が出る日程は3月23日と報道されていた。私はその前後を取材しようと、2月にコロンビアに入った。知人を通じFARCへ取材を申し込んでいる中で、現役戦闘員のリチェルに話を聞くことができた。



コーヒーの収穫を終えたアルシピアレスさんと家族

コロンビア南西部カウカ県にカルドノ市がある。市内には6つの先住民族自治区があり多くのナサ民族が暮らしている。家族単位でコーヒーを作り暮らす零細農家が多い。収穫期は年に一度であり、他の現金収入源は限られている。コロンビアに通いだして間もない2007年から、カルドノ市内サンローレンソ自治区に暮らすナサ民族のアルシピアレス（以下、「アルシ」）たち家族を訪ねていた。リチェルはアルシの従兄弟にあたる。他にも、アルシの弟、息子、妹の夫や近隣の人々など、地域から数多くの人々がFARCに入隊していった。

初めてアルシの家にお邪魔した日、彼の家でFARCのPRビデオを見た。なぜそんなものを持つてるのか聞くと、やや誇らしげに「俺たちはFARCだけ」と言い説明してくれた。当時、彼の弟が戦闘員としてFARCで活動していた。アルシ自身の入隊経験はなかったが、FARCの考えを支持し、物資の運搬を手伝い家に兵士を泊めるなど、協力者として積極的にFARCと関わりを持っていた。当時まだ15歳だった彼の長男も、日本の高校にあたる学校を卒業すると同時にFARCに入隊した。のちに、彼にその理由を聞くと「社会を変えるため以前から決めていた。私の人生の中でやらなければいけない経験だった」と話した。

3. FARC活動地の歴史

なぜ、こんなにFARCを支持する人々が多いのか。カルドノあるカウカ県北部は、20世紀初頭、多くの資本家に先住民族の土地が暴力的に奪われてきた。字が読めない住民に対し、説明がないまま土地の譲渡契約書にサインをさせられ、明け渡しを拒否する住民に暴力が振るわれたことを聞いた。土地の権利を奪われて以降、元来、その土地の主人であった人々は、同じ場所に住み続けるため借地代を地主に支払うこととなった。



カウカ県北部に広がる肥沃な大地で先住民族が土地を奪われてきた

ある地域では、地主の農場で週に5日、6日無償で働くことで借地代の代わりとし、空いた時間で自分たちが食べるトウモロコシの種をまいたと聞く。この理不尽な環境を変えようと立ち上がる人々に対して、ナサ民族自治区ハンバロでは70年代、抗議した男性が、地主が雇う殺し屋に殺害された。遺体は切断された上、トウモロコシを入れる大きな袋に詰め込まれ、翌朝、自宅前に捨て置かれた。

この状況に抵抗するため、カウカ県では1970年代、「土地の解放」を中心に据える先住民族運動が活発化する。カルドノ出身でナサ民族のカトリック司祭だったアルバロ神父は、土地解放運動の先頭に立ってきた。彼の行動は、今もナサ民族の学校で教えられている。神父は先住民族である住民に、土地の主権者は自分たちであることを説き、地主から土地を解放しなければならぬと、住民を組織していった。活動を続ける中で、1984年、地主が放った暗殺者に殺害された。

土地問題を抱えてきたカウカ県北部には、様々な社会運動組織が出入りし住民運動に関与していた。その中にFARCを始め、ELN(民族解放軍)、M-19(4月19日運動)など、複数のゲリラ組織もいたという。1980年代には、カウカの先住民族自身が銃を取り「マヌエル・キンティン・ラメ武装運動(MAQL)」としてゲリラ活動を始めている。

この地域では、声をあげ、不正を押し付ける強者に対峙することが生きるために必要とされてきた。1970、1980年代を知るアルシさんは、「子どもの時にゲリラを見て、かっこいいもんだなって思ったよ」と話す。日常の中に、極めて身近なところにゲリラが存在し、憧れの目で眺めていた。

1991年、コロンビアで新憲法が制定された際、MAQL、M-19などが武装解除し、制憲会議に参加した。しかし、武装活動を継続していったFARCは、カウカ北部ではそれ以降も強い影響力を残してきた。

4. 若者にとってのFARC

1990年代以降も、多くの若者がFARCに入っていた。このことについてアルシから話を聞いた。カウカ北部で活動していた部隊の一つにハコボ・アリーナ戦線がある。この時期、「ハコボ」であることは、若者にとって「かっこいい」存在と捉えられていたようだ。当時、ハコボの司令官にカリチェという人物がいた。背が高く白人系の顔立ちのカリッチェは、見た目にも都会的な雰囲気漂っていた。人を惹きつける魅力があり、説得力のある話でアルシも引き込まれたという。

カリチェは、様々な集落を訪ね、住民を集めては、農村が置かれてきた状況を説明し、不正がはびこる社会を変えるために革命が必要だと説いた。コーヒー畑の中で、若者たちを集めて車座に座りながら、その輪の中で快活に話すカリチェの姿を、アルシは特に印象に残っているとして好意的に話した。

カリチェの言葉に焚き付けられるような思いを抱く若者たちがいた。アルシの長男ハビエルも周囲の若者と同様、その一人だった。私がアルシたちと出会った当時、ハコボの隊員の大多数が先住民族だったと聞いた。不平等な社会で生きる若者たちの情熱を吸収しながら勢力を増していったFARCの姿があった。

一方、カウカの先住民族運動の中心組織CRIC(カウカ先住民族地域協議会)は、ゲリラと距離を取りながら、農場占拠や道路封鎖など、より活発な復権活動を展開し現在へ続く。ゲリラと地域の関係の深さが、反ゲリラ勢力の準軍民兵組織や政府軍による住民への迫害に繋がってきた。先住民族運動自体をゲリラと同一視され、「テロリスト」と報道される場面もあった。

2001年、ゲリラに対し強硬策をとるウリベが大統領に就任すると、ゲリラに対して、激しい攻撃が繰り返された。ゲリラ活動地では、そこに暮らす住民は、少しでもゲリラと関係を持ったと疑われれば攻撃の対象となった。軍と癒着していたといわれる民兵が市民を大量虐殺するという事件が相次いだ。迫害を受ける農村から避難民が続出した。カウカ県南部で活動していたFARC兵士は「ウリベが大統領になり、食糧補給など、住民の協力が得られにくくなっていった。居場所などを密告する住民も増え、活動することが難しくなった」と話す。

FARCは組織活動を維持するために住民への監視を強め、軍や民兵と繋がると疑う一般住民を殺害する。ゲリラ、民兵、軍の間に挟まれる地域では軍事組織から距離を置き自立の道を模索する指導者が現れる。FARCはそれすらも「裏切り」と捉え、銃を向け、命を奪った。見せしめ的に集団虐殺があった地域もある。

カウカ県北部にトリビオという山間の町がある。ここにはウリベが大統領に就任して以降、対ゲリラの警察施設が置かれたことで、FARCの激しい攻撃にさらされてきた。住民の犠牲者も多数出ている。あるFARC兵士にトリビオのことを聞くと、「ここでは中立はあり得ない」と言い、警察への攻撃に、住民への圧力の意味が含まれていたことを示唆した。激しさを増す状況の中で、FARCを支持する人々と、そうでない人々の距離が地域によって大きく分かれていった。

5. 和平交渉の中で揺れ動く人々

和平合意を受け入れ、武装解除プログラムに参加した FARC の部隊は、2017 年 1 月 31 日より 26 ヶ所の集合地へ集まった。一部、合意内容に反対する戦線や小規模なグループは、未だ銃を手にして活動を続けている。全国に散らばる 26 ヶ所の集合地の一つがカウカ県カルドノである。

2016 年 2 月から 5 月にかけて、私はカルドノを訪ねていた。現地では集合地を置くために FARC と地元住民との話し合いが続いていた。合意が出るとされていた 3 月 23 日を間近に控え、FARC と集合地を受け入れることを検討していたカルドノは、慌ただしく揺れ動いていた。カルドノはもともと FARC と関係が深い地域で、当時から FARC からカルドノに集合地の受け入れを要請していたという。

当時、和平合意の瞬間を FARC のキャンプ地で取材できないかと考え、私はアルシを通じて、カウカ県の FARC のハコボ戦線に取材を申し込んでいた。4 月にハコボ戦線所属の構成員に聞いた話では、FARC は 6 ヶ所の集合地に武器を持った状態で集まること、集合地の周囲に非武装の緩衝地帯を設けること、武装解除には第 3 国による監視団が当たることを要求していたという。

一方、この時に話を聞いた他の戦線に属する 2 名の FARC 構成員の話では、政府は FARC に対して、全国の構成員が武器を置いた状態で 1 ヶ所の集合地に集まるよう求めていたという。非武装で 1 ヶ所へ集合することを要求した強硬な政府の態度が見て取れる。

しかし、FARC にとっては自身の安全確保が重要な問題であり、信頼を置ける場所に集合地を建設することは不可欠だった。過去には、和平合意に応じ 1985 年に合法政党の愛国同盟 (UP) を結成し、政治参加を果たしたが、3,000 人もの関係者が次々と暗殺され、政党資格停止に追い込まれた歴史がある。安全確保が保証されなかったことが、3 月に合意へ至らなかった大きな要因の一つとなった。



武装解除に臨む FARC 戦闘員たち

FARC の支援者が多いカルドノでも、受け入れに反対する人々もおり、意見が分かれていた。地元の指導者や、評議会の代表団がなんどもハコボ戦線のキャンプ地に招かれ、部隊指導部との話し合いが行われていた。反対する人々は、主に、FARC に銃を向けられてきた人やゲリラと距離を置いた先住民族運動で自分たちの社会を前に進めていきたいとする人々だった。カウカの先住民族組織 CRIC は、FARC の受け入れに反対していた。その理由としては上記の理由のほか、「紛争後」に FARC が政治参加することで、先住民族運動に関わる人々が FARC 側に流れていき運動が弱体化してしまうのではないかと恐れていた。

4 月にカルドノで開かれた、左派系市民団体が主催する、和平交渉に住民がどう関わるかを話し合う集会では、ハバナから送られた FARC 最高司令官ティモチェンコのビデオメッセージが流され、いかに FARC がコロンビアの農村のために交渉にあたっているかが PR された。この集会には現役の FARC 構成員も準備に多数関わっていた。カルドノでの調整員には 50 歳代の男性構成員があたっていた。彼は年齢的に高齢なため、戦闘員としては活躍することはできないが、普段から農村に入り、部隊が活動しやすくするため、住民との間に入り調整する仕事を担っていた。

その後、集合地がカルドノに決まった後も、部隊が実際に移動してくる半年前から、同様に高齢の調整員が複数現地入りし、多岐にわたる和平合意内容の周知や、市民団体など外部関係者やマスコミの宿泊先となる場所の確保など、細やかな動きを見せていた。これは補足ではあるが、こうした高齢の構成員は数十年間 FARC で戦闘員として生きてきた。調整員の一人は家族との関係はすでに途絶え、他に行き場を失っていた。一般社会の中で生きる場所を見つけることが困難な彼らに、戦闘以外の場面で FARC が居場所を与えていた。

2016 年 5 月に私が帰国する間際には、カルドノの先住民族代表団がハバナに赴き、FARC 最高指導部と直接話をするようになった。彼らが渡航したのは、その後、間もなくしてのことだった。渡航費は先住民族自治体の予算から都合し、一週間のハバナ滞在費用は全額 FARC が持った。現地では最高司令官を始め指導部との会談が催され、自治体への協力が要請された。

6. 司令官の告白

2017 年 1 月末から 4 月末まで、再びコロンビアに滞在した。この間、カルドノを含めて 3 ヶ所の集合地を訪ねた。カウカ県に隣接するナリーニョ県北部の農村

ポリカルパに、第8と第29戦線の集合地が置かれている。ここで第29戦線のハビエル・グスマン第2司令官に話を聞いた。

現在50歳の彼は、大学生だった26歳の時に戦闘員としてFARCに入隊した。父親が農民運動の指導者だったことから、幼い頃から社会問題に関心を持ち、16歳で共産党に入党した。FARCに入った当時、愛国同盟の仲間たちが次々と殺されていくのを間近で見ていた。ハビエルがFARCに入って以降、市民である彼の兄弟が暗殺された。これ以上身内へ危害が及ぶことを恐れ、彼は家族との関係を断ち20年以上が過ぎた。

彼に和平合意と今後の展望について聞いた。彼は「この戦争は長すぎた」と言い、「我々も多くの仲間を失った。誰もが疲れている」と話した。さらに続ける。「今の我々は、ボゴタ（首都）を落とすことはもうできない。一度の戦闘で数十人の政府軍兵士を殺害しても、何も変わらないことはこれまでの経験が証明している」

「武装闘争を続ける上での社会的状況、コロンビア人自身の意識が大きく変わってしまった」そう近年の苦境を吐露し、「だからこそ、私たちも変わらなければいけない」とした。口調はあくまで穏やかだ。

コロンビアには内戦の原因である社会格差、貧困が今なお拡大しながら横たわる。社会変革の必要性は変わらないが、そこに向かう手段は大きく変わった。携帯電話やインターネットなどの普及により、農村自身が直接メッセージを発信し、広く世界と繋がりだしたことは大きな変化だ。近年のFARCは保身のために農村の自立を阻んできた。

ハビエルが言葉を続ける。「世の中は変わった。私たちが変わらなければならない」「農村の力を我々は信じている。農村を尊重しながら、どう生活を向上させていけるかが重要だ」「我々は銃を置く。より広く社会運動を展開するために、『言葉』を武器に戦い続ける」

「我々は変わる決断をした。しかし、本当に平和な社会を作るためには政府、コロンビア人自身が変わらなければならない」とし、「若いエネルギーを政治に向けよう活動し続けていきたい」と展望を語った。



24年間の武装闘争に終わりを告げたハビエル第二司令官

7. 本当の平和とは何か

以上は、コロンビアのある農村から見た、一つの戦争の形だ。善悪だけで語るができない複雑な人間の思いが交錯してきた。その中で、53年間存在し続けてきたFARCが終焉を迎えたのは、大きな時代の変化だと感じる。しかし、内戦の原因である社会格差は今なお拡大し続けている。その中で、ゲリラには、コロンビア社会に居場所を失った人々が辿り着き、その受け皿となってきた一面がある。「FARCは新しい自分を獲得できた場所であり、苦楽を共にした仲間は家族そのもの」と話す兵士がいる。

詳細を述べるスペースはないが、この「和平」からこぼれ落ちた人々がいることも忘れてはいけない。第一戦線は今もなお武器を手に活動を続けている。太平洋岸の港町トゥマコでは、麻薬の積み出し港となっているため、麻薬マフィアや形を変えた民兵組織が存在している。それらと対立してきたFARC構成員は、武器を置いてしまうと自身だけではなく、彼、彼女らと繋がる家族や仲間が危険にさらされる。彼らはFARCを抜けて新たな組織を結成し、闘争を続けている。

誰もが戦争など望んでいないにもかかわらず、コロンビアの辺境で生き続けてきた人々は今も社会の歪みを一身に背負い続けざるを得ない状況にある。ゲリラ兵士が再び居場所を失わず、誰もが武器を置き暮らせる社会建設こそが、本当の意味でコロンビア社会への平和の訪れとなる。

8. 最後のFARC兵士

リチェルが私に言った。「戦争が終わったら日本に行きたい。俺も広い世界を見て見たい」。彼の名はゲリラ名。活動のために本名を捨てていた。本名で取得したパスポートで世界を見るという、私にとって当たり前のことを彼は夢として語った。6月初め、私のFacebookのタイムラインにリチェルの言葉が流れた。「17年連れ添った銃を今日置いた」。銃にキスする写真が添えられていた。言葉にすることができない彼が過ごした36年分の思いが滲み出ているように感じた。



この銃口を、二度と向け合うことがない世界を作らなければならない。

標高 3000 メートルを超える火山に囲まれるアティトラン湖。そのほとりにあるサンティアゴ・アティトランは、先住民族の大半が軍の恐怖に脅えていた 1990 年に軍隊を追い出したことで有名になった。25 年ぶりに再訪し、車いすで暮らす男性の目を通して四半世紀の歩みをたどり直してみた。

観光客が集まる湖畔の中心都市パナハチェルから船で 30 分、ゆるやかな斜面に広がるまちが見えてきた。25 年前、湖畔の栈橋から市街地までは、だだっ広い原っぱの斜面を歩いた記憶がある。ところが栈橋を降りたその場所から、民芸品店やホテル、食堂が林立し、トゥクトゥク（三輪タクシー）がけたたましく走り回っている。

徒歩 10 分ほどの白い教会は昔のままだが、土道はなくなり、石畳で舗装されている。まちはずれの軍の駐屯地跡には、軍に殺された 13 人の名前と生年月日が刻まれた石碑が点在し、「平和公園」になっている。

サンティアゴは 1980 年に軍の駐屯地が設けられて以来、停電で真っ暗になるたびに覆面の男が徘徊し、農民組織や教会のリーダーらの家に押し入って



サンティアゴの教会。かつてはここも舗装されていなかった



教会近くで出会ったまつりの行列

連れ去った。犠牲者は 10 年間で千人を超えたという。軍は夜間の外出を禁じていたから、覆面の男の正体はわからないが、だれもが軍人だと思っていた。

1990 年 12 月 2 日午後 8 時ごろ、マスクの男が 1 軒の家の扉をたたき、押し入ろうとした。住民は別の出口から逃げ出して大声で助けを呼んだ。隣人がすばやく集まり、男を捕まえマスクをはぎ取った。男の仲間が駆けつけて空に向けて発砲し、さらに住民を撃った。逃げた男たちを追いかけると、軍の基地に逃げ込んだ。当時 16 歳だったホセ・ソソフ（42 歳）は、教会の鐘が打ち鳴らされ、あちこちで叫び声があがるのを聞いて、中央公園に駆けつけた。数千人が郊外の駐屯地に向かった。話し合うために白い布を掲げていた。

駐屯地に近づくと、軍のスピーカーは「われわれは問題を起こしたくない」とがなり立て、対話には応じない。さらに近づくと発砲し、地面に伏せた人々を撃ちはじめた。ホセは腰や尻に激痛がはしった。駐屯地の入口が開いて、懐中電灯をもった兵士が見回るあいだ、死んだふりをしていた。

いどこに背負われて逃げ、道路脇の大きな石の下に隠してもらった。目の前の道路は土砂崩れで救急車が通れず、午前 4 時まで発見してもらえなかった。

当時、サンティアゴには病院はなかった。唯一の医者は「血清がなく輸血できない」と言い、船と車を乗り継がなければならぬソロラ市の病院まで運ばれることになった。搬送されて手術を受けたのは午後 3 時すぎ。医師は父親に「あすまで生きられ



旧軍駐屯地で 13 人が虐殺。倒れた場所に名が刻まれた碑がある

ば命は助かるかも」と言った。このとき4人が搬送されたが、2人は息絶えた。駐屯地前で絶命した11人を含め、計13人が犠牲となった。

事件は国内外のメディアに取りあげられ、大統領も陳謝し、軍はサンティアゴから撤退した。その後も軍は何度か侵入を企てたが、そのたびに鐘を打ち鳴らして住民が座り込んで阻止した。

ソラ市の病院で一命を取り留めたホセは「グアテマラではこれ以上治療できない。一生寝たきりで、座ることもできない」と宣告された。

悲嘆に暮れていたとき、米国の人類学者が事件の状況を聞きに来た。彼は各地の虐殺犠牲者が埋められた「秘密墓地」発掘に携わっていた。そして「アメリカで治療を受けてみないか」と提案した。2カ月後、米国に渡り、手術とリハビリで1年余り滞在した。

帰国すると、家に車いすが用意されていた。家のなかの段差はスロープを設けたが、当時のサンティアゴのまちは土道ばかり。車いすで歩く人は皆無だった。ホセも8年間一步も外出せず、「なぜこんなことになったんだ」と毎晩のように泣いて暮らし、体重は100キロを超え、糖尿病も発症した。

8年後のある日、友人に誘われて外出してみた。さらに、重度障害者の娘を持つ男性が、障害者団体をつくることを呼びかけ、ホセも参加することにした。それが「障害者とその家族と友人の協会」(ADISA)だった。

軍が撤退してまちの活気がもどり、1996年の内戦終結でサンティアゴも急速に発展した。ホセの家の前の道路も舗装された。当時、障害者の多くは家に閉じ込められていた。車いすで歩くホセは、「かわいそうに。罰が当たったんだよ」「恥ずかしくないのか

ね」などと、陰口をたたかれた。そのたびに、「見るだけでなく、僕の能力を示すために話を聞いてくれ」「欲しいのはその機会なんだ」と訴えつづけた。

ADISAには約600人の会員がいる。その6%ほどはホセのような内戦の犠牲者という。ADISAは、子どもたちが読み書きや算数を習う学校をはじめ、民芸品をつくる工房も営む。一般店舗に卸す紙袋が稼ぎ頭だが、古紙でつくるイヤリングや腕輪などの装飾品も人気という。道端のビニール袋を拾い集めて財布や買い物袋に加工するメンバーもいる。「アティトラン湖という大自然にあるまちだから、環境問題も活動の柱にしています」と、担当のサルバドル・メンドサ(25歳)は語る。

ホセは大学の教員養成課程で学ぶ学生でもある。「このまちではじめて車いすで歩き、今は差別も薄れて普通に暮らせるようになった。今度は障害者で初の教師になって、障害があっても尊厳をもって生きる実例を示したい。サンティアゴがグアテマラの平和の先駆者になったように」

ホセと話していて、事件の1年後に訪れた際に案内してくれた、私と同年代のフェリペを思い出した。たしかホセの家の近所に住んでいたはずだ。



古新聞で器をつくるADISAのメンバー



古紙で作った装飾品の数々。米国の芸術家が指導してくれた



自宅で車いすを操るホセ。



ホセの自宅前の道路。以前は土道で土と石の通路をスロープに車いすでは歩けなかった

フェリペは当時24歳で大学に通い、「以前は外国人と会っても、軍が怖くて本当のことは話せなかった。今はだれにでもしゃべれる。自由を実感しているよ」と言い、「読み書きもできない貧しい人を助ける弁護士になりたい」と語っていた。

彼の消息を尋ねると「刑務所にいるよ」とホセは言った。教師だったが、数年前に女生徒に対する暴行事件を起こしたのだという。まじめで繊細な若者だったはずだが……。思わずため息をついた。

アティトラン湖の村々には、それぞれデザインの異なる織物が受け継がれている。だが、先祖代々受け継いできた天然染色の技術は、化学染料の普及によって失われしまった。そんな技術の復活に取り組むグループについて、『ソソリサ』146号で村岡貞夫さんが報告している。

エレナ・チキバル・ケフ(41歳)はその女性グループのリーダーだ。

殺戮事件のときは14歳。「発砲音があったら家から出るな」と言われていた。「お前はゲリラか」と軍人に問われ、スペイン語が理解できないから、「はい」と答えて殺された知人もいた。

戦争で被害を受けた女性の人権問題に16歳からかわり、2008年には女性で唯一の市議会議員にもなった。

女性の地位向上には単に織物を売るだけでは足りない。新たな付加価値づくりを考えているとき、祖父母の時代に「天然染色」があったと聞いた。そして、日本人の専門家に会い、日本大使館の支援を受けた「天然染色研修センター」は、2013年に完成した。

センターの裏には、染めの素材となる植物が植えられている。穴を開けて吊ってあるウチワサボテンの葉には白いカビが発生している。カイガラムシという。指先でつぶすと紫の液体が指先にべったり付着した。コチニールだ。

現在はペルーなどから輸入しているが、3年前から栽培をはじめた。そのほか10種類以上の植物を栽培している。「天然染料は環境にも健康にもよい。失ったものを取りもどす過程です」

エレナらのグループは、今、戦争の記憶を残すプロジェクトも計画している。犠牲者の家族の証言を集めて副読本をつくり、学校に配布する。事件の

あった「平和公園」には、事件だけではなくマヤの文化・伝統も紹介する資料館を建てたいという。「あの事件からすべてがはじまった。戦争の記憶を忘れてはいけない」。その手本は、JICAの研修で訪れた広島原爆資料館なのだそうだ。

夕食時、港の近くの食堂に入った。テラピアというずんぐりした淡水魚の料理を頼んだ。「ブルーギルやブラックバスも料理もあるよ」と店のおやじ。アティトラン湖の環境も悪化しているようだ。せっかくの魚料理を楽しむためビールを注文したら「アルコールはない」と言う。

食後に雑貨屋に行くと、「アルコールは限られた店でしか売ってないよ。ここの住民は飲んで騒ぐのはきらいなんだ」。ホテルの従業員も「アルコールを出す店が少ないから、トランキーロ(平穩)でけんかもない」と言った。エバンヘリコが多いことが禁酒の店が多い理由らしい。

禁酒を余儀なくされたのは残念だけど、殺戮事件の現場が「トランキーロ」を誇るまちになっていることが感慨深かった。



ウチワサボテンに発生したカイガラムシ。

つぶすと紫の液体で出てくる



21世紀以降、サパティスタ民族解放軍（EZLN）や全国先住民議会（CNI）傘下の先住民組織は、政党政治から距離を保ち、「事実としての先住民自治」を実践するという方針を堅持し、各種の選挙には参加することはなかった。2016年10月の第5回CNI議会1期集会で、先住民統治議会（CIG）の女性広報官を2018年のメキシコ大統領選挙に独立系候補として登録するという方針が表明されると、EZLNの政党化、あるいは従来の「事実としての自治実践」という路線の転換があるのかと、大きな驚きと関心で迎えられていた。

第5回CNI議会1期集会：地核の激震を！

CNI創設20周年集会（オベンティック）を挟んで、チアパス州サンクリストバル市の統合的養成先住民センター・大地大学（CIDECI-UniTierra）で開催されたCNI第5回議会（2016/10/9～14）には、国内32先住民族から約500名の代議員が参加した。従来のような迫害や苦痛を告発する段階から、「上の政治」の心臓部に打撃を与える反撃に出ないと、CNIは霧散消滅すると、EZLN代議員は指摘した。

それを避けるためには、国の統治に意欲のあるCNI代議員によって構成されるコレクティボを組織する必要性が訴えられた。当初、サパティスタ管



CNI創設20周年・第5回CNI議会（オベンティック）で挨拶するベラクルス州ポボルカの先住民女性

轄地域で組織されていた「善き統治評議会」に倣った先住民統治評議会（Junta de Gobierno Indigenaという名称だったが、オアハカ州女性代議員の提案でCIGとなったとされる。

さらにCIG女性広報官を大統領選挙の独立候補として擁立する方針も提起された。提案は少なからぬ驚きや怒りで迎えられ、大半の出席者は沈黙を守ったが、同意が得られたわけではない。長い沈黙の後、「提案はこれまでやって来たことと矛盾する点があるが、先住民族が見える存在となるうえで、CNIを再構築する手立てかもしれない」という発言を受け、各地区に提案を持ち帰り、協議することになった。12月12日までに結果を集約し、2016年末の2期集会で、提案を再検討することになった。

提案に対する多様な反響

CNIとEZLNの提案が報道された後、メキシコ国内では様々な反応が見られた。無視や無関心を除けば、①2001年以降の基本方針「選挙を通じた政治実践をしない」を全面的に転換したとして批判するもの、②選挙を通じた政治参加の方針転換を歓迎するもの（民主革命党PRDや独立派候補、チアパス司教など）、③2006年の「別のキャンペーン」と同じように、反ロペス・オブラドール陣営の形成に向けたマヌーバーで、左派勢力の分断になると危惧を表明するもの、という3種類に分類できる。

とりわけ、PRDに替わる新組織の国民再生運動（MORENA）から、2012年の大統領選挙に出馬予定のロペス・オブラドールは、EZLNの投票ボイコットの呼び掛けによる票数の減少が、2006年と2012年の過去2回の大統領選挙の敗因であるとして、EZLNの路線転換を激しく批判している。

選挙を通じた政治への参加表明に関して様々な誤

解が見られることは、ガレアーノ副司令（元マルコス副司令）やモイセス副司令官によって指摘されている。CNI と EZLN の共同提案は、CIG 女性広報官である先住民女性候補の大統領選挙において当選させることが目的ではなく、メキシコと世界の農村・都市の貧しい人々に闘争を継続し、組織化を推し進めることと述べている。EZLN 構成員は投票の権利を行使するが、EZLN 自体が政党にはならない。EZLN メンバーが CIG 広報官に選出されることはなく、大統領候補にはならないと明言している。

第5回 CNI 議会 2期集会：震央からの知らせ

EZLN が呼びかけた「人類のためのコンシエンシアス」の集会に挟まれる形で、第5回 CNI 議会 2期集会は2016年12月30日～2017年1月1日に開催された。集会には、国内25州の43先住民族から代議員532名など約千名が参加したとされる。CNI 関係者だけで開催された集会では、430名の代議員が CIG 創設の提案に対する支持を表明し、80名の代議員からは協議続行中であるという報告があった。一方、20名の代議員からは、迫害や弾圧などで協議が実施できていないと報告された。こうして、2期集会において、CNI と EZLN の共同提案は承認されることになった。CIG の組織化や構造に関する議論も行われ、CNI 傘下の地区から男女1名ずつの CIG 議員（concejales）を選出することになった。

1月1日、2期集会の全体集会是、EZLN 蜂起23周年記念を兼ねて、オベンティックで開かれた。オベンティックの集会には、年末年始に EZLN の呼び掛けで開催されていた「人類のためのコンシエンシアス」の参加者を含め約3千名が参加した（そんりさ160号：角報告参照）。全体集会では、各地で CIG 議



2期集会の全体集会（オベンティック）、CNI 女性5名とEZLN 副司令官

員を選出する作業を行われた後、5月27・28日の CIG 創設集会の場で、CIG 女性広報担当官を選出することが報告された。

CIG の役割

CIG の役割や位置づけなどに関して、CNI の Web ページ (<http://www.congresonacionalindigena.org/>) に概要が記してある。CIG は、CNI 傘下の先住民組織・運動体が1996年10月の創設以来展開してきた抵抗と反乱のなかから生まれた自治の集団的体験に根差すものとされる。EZLN と同じように下から左からの反資本主義の運動を展開してきた CNI は、権力の掌握を目指すことはない。先住民族や市民社会に対して、資本主義システムによる破壊を止めるために組織化を呼びかけるもので、政治政党と競争することを目指すものではないという。

CIG は、CNI の準備段階である先住民フォーラム時代から確立されていた CNI の7つの行動原則に従って、活動するという。その原則は、①自分に利益誘導するのではなく、皆に奉仕する。②誰かの利権の代弁者ではなく、皆を代表する。③破壊するのではなく、建設する。④命令するのではなく、順守する。⑤強制するのではなく、提案する。⑥論破するのではなく、説得する。⑦上昇志向ではなく、基盤に根を伸ばす、というものである。

このように、水平性、集団的な現状分析と意思決定を踏まえて、CIG は従来の政治とは異なる「別の政治」を模索する。CIG が力点を置くのは、2018年の大統領選挙キャンペーンではなく、女性先住民の広報担当者の活動を推進することである。

広報担当官として先住民の女性が指定された理由は、女性ということだけで、差別され、屈服を余儀なくされ、暴力を振るわれてきた存在であるからとされる。すなわち、資本主義と家父長制による暴力を自らの身体に記憶する先住民女性こそが、CIG 広報官として最もふさわしいという。広報官となる先住民女性は、母語話者であることが不可欠である。それは彼女が自らの文化の智慧の保持者であり、家族や民族を世話する存在、生命と母なる大地の番人であるからとされる。

CIG 創設にむけて

2017年3月末に公表のCIG創設集会の呼び掛けによると、国内26州の91地区と多くの先住民移住者が居住するメキシコ大都市圏とグアダハラ大都市圏の2地区、計93地区から、男女1名ずつのCIG議員を選出するという。CNIの活動歴を有し、帰属する先住民族の歴史・文化に精通し、共同体に認知された精神的支柱であることが必須条件とされる。しかし、チアパス州海岸部地区とカンペチェ州カンデラリア地区がメスティソ地区となっているように、必ずしも先住民言語話者である必要はない。

人口1万人超でCIG議員地区がないのは、オアハカ州チャティーノ、プエブラ州ポポルカ、サンルイスポトシ州パメ、チアパス州のグアテマラ難民カンホバルの4つである。人口千人以下でCIG議員地区なのが、バハカリフォルニア州クカパとクミアイ、ソノラ州セリ、チアパス州ラカンドンである。しかし、先住民族が居住するサカテカス、トラスカラ州では、CIG議員地区が設定されていない。

先住民族が多数居住している州には、多くのCIG議員選出地区が設定されている。チアパス州のツェルタル（高地、北部山地、国境部）やツォツィル（高地、中央部、海岸部）、オアハカ州のビニサー（北部山地、南部山地、中央盆地、地峡部）やニャヌ・サヴィ（高地、中部、低地、海岸）のように、同一先住民族でも複数地区が設定されている例もある。

CIG 創設集会

2017年5月27・28日、CIG創設集会がCIDECI-UniTierraで開催された。参集した1,500名余りの代議員によって、地区から選出されたCIG議員の承



創設集会演壇のCIG議員、中央広報官マリチュイ、左サラ・ロベス（カンペチェ州マヤ）、右ベッティ・クルス（オアハカ州地峡ビニサー）

認と広報官指名が行われた。広報官に指名されたのは、ハリスコ州トウспан出身の先住民族ナワの女性で伝統医療に携わってきたマリア・デ・ヘスス・パトリシオ・マルティネス（愛称マリチュイ、1963年生まれ）だった。

当初の地区割りではCIG議員186名が就任するはずだったが、創設集会で就任したのは71名である。ゲレロ州やミチョアカン州からはCIG議員は選出されず、チアパス州でもツェルタルのCIG議員は選出されているが、ツィツィルのCIG議員は未選出となっている。未選出地区でのCIG議員選出がいつ行われるかは定かではない。

今後の課題

今後、CIGが着手すべき活動のひとつは、女性広報官マリチュイを2018年大統領選挙の独立系候補として正式に登録する作業がある。非登録政党が候補者を擁立するには、17州以上で選挙登録者総数の1%に当たる約85万の署名が必要とされる。2期集会の直後から、CNI関係者の一部は、8月以降からの地区での署名活動準備の必要性を強調していた。

しかし、CIG創設の目的は、大統領選挙のキャンペーンを展開することではなく、メキシコと世界の農村・都市の貧しい人々が、闘争を継続し組織化を推し進めるようにすることである。2005年7月のラカンドン密林第6宣言発表以降に展開されたEZLNの「別のキャンペーン」でも、2006年大統領選挙キャンペーンとは無関係に、「別の政治」を構築することが模索され、全国規模での先住民族の組織化が追及されていた（ソンリサ100号小林記事参照）。CNIの伝説的指導者フアン・チャベスは、マルコス副司令とともに国内各地を行脚し、「別のキャンペーン」賛同の先住民族・組織・共同体は163に達していた。

しかし、2006年5月にメキシコ州サンペドロ・アトラプルコで開催の第4回CNI議会から10年以上もCNI議会は招集されなかった。今回のCIG創設によって、「別のキャンペーン」の轍を踏むことなく、先住民族や市民社会による全国規模での「共同体的・自治的な政治空間」が継続的に構築されていくことを期待したい。

本の紹介 『マラス 暴力に支配される少年たち』

(集英社 2016. 11 工藤律子／著 篠田有史／写真)

工藤 律子



「マラス」という単語でネット検索をかけると、現れてくる、スキンヘッドや顔面までタトゥーに覆われた、恐ろしげなギャングの若者たち。そんなイメージと、私が実際に会い、話をしたギャング青年たちは、ある意味、まったく違っていた。

ラテンアメリカに強い関心を抱く人なら恐らく、マラスという言葉とそれが指す集団の存在は知っているだろう。が、日本の一般メディアはその問題をほとんど報道しないうえ、各国のメディアが映し出す彼らの姿も、マラスのメンバーや彼らがいる地域がとんでもなく「特殊」であるかのようなイメージばかりを作り出している。そうやって、問題の本質や彼らが私たちの世界の一員であるという事実を、かき消している。

ホンジュラスにはなぜ3万人を超えるギャングがいるのか、ラテンアメリカはなぜ世界一貧富の格差の激しい場所になっているのか。周囲にそう問いか

ければ、「そんなこと、私たちには直接の関係がない」という反応が返ってきそうな社会を前に、私はこの本を通して伝えたい。

ラテンアメリカの子ども・若者たちの現実と、日本をはじめとする他の国々の同世代の現実は、深く結びついており、私たちはそこに浮かび上がる世界的な問題に、ともに取り組まねばならないということ。

私にとって、学生時代に留学で出会ったメキシコをはじめとするラテンアメリカの国々は、慣れ親しんだ人々、「家族」や「友人」、「仲間」が暮らす場所だ。だから、その社会情勢や深刻化している問題には、いつも特別な関心を抱いている。

最近感じるのは、日本の知人たちがこの国の子どもや若者が抱える問題として憂えていることが、メキシコや中米で取材している問題と、あまりにも似ている、同じだということだ。

「自分に自信がない」、「居場所がない」、「希望がみえない」、「とりあえずお金がないとだめだと思う」、「おとなは信用できない」etc.

日本で今、「不登校」など様々な形で「普通」の道筋から「外れた」とされる子どもや若者と接するおとなたちは、目の前にいる彼らの不安を、そんな言葉で表現する。それはまさに、家庭での虐待を逃れて路上にきた「ストリートチルドレン」と呼ばれる子どもたちや、マラスに入る少年たちの思いと重なる。

『マラス』には、三人、ホンジュラスの元ギャングの若者が登場する。

まず一人は、マラスがまだ中米に広がっていない時代に、大物ギャングとして名を馳せたアンジェロ。本の表紙を飾っている男だ。彼は、首都テグシガルパのスラムで育ち、いくつもあった若者ギャング団に憧れ、暴力を用いてその頂点に立ち、何でも思い

通りにできる金と権力を手にする。が、自動車強盗として襲った車の主が、銃を突きつけられてなお、静かに言い放った一言が、彼の心を揺さぶる。

「私にとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」

アンジェロは、ボディガードを雇い、とことん武装していても、死への恐怖を消し去ることができずにいた。なのに、その男は丸腰で、死ぬことなど怖くない、と言ったのだ。そのことが伏線となり、彼はのちに刑務所で「変身」する。そして罪を犯した者たちを、まっとうな人生へ導くことをライフワークとするようになる。

マラス世代のネリは、暴力を振るう父親のいる家を離れた一心で、地域の若者たちがこぞって参加していたギャング団、マラスの一つに入る。

「ギャングになってからは、兄貴分が食事や服、何でも与えてくれた。ストリートが家で、ギャング団が家族だったんだ。(中略)ほとんどの時間を仲間とすごした。ほかに居場所がみつからなかった」

彼は、自分の心の癒しと問題解決をマラスに見出そうとするが、それは無理な話だった。敵に殺されそうになり、命からがら逃げ出した後に訪れた教会で、こう気づく。「僕には愛が欠けていた」

その後、マラスを抜け、教会でボランティア活動をしなが、まじめに働き、ギャング少年たちに、ラップミュージックを通して、新たな人生を歩むよう呼びかけている。

父親を殺したギャングに復讐しようと、敵対するマラスに入った少年、アンドレスは、「人をひとり殺せ」という命令にどうしても従えず、マラスを抜ける決意をする。そのために故郷を離れ、メキシコまで旅を続ける。

2013年頃から急増した米国への不法入国を試みる中米出身の子どもたち同様に、バスでグアテマラを横切り、川を渡ってメキシコに入り、米国へ向かう貨物列車の屋根に乗り…冒険の末、運の良いことにメキシコで、親切な警官の助言や難民支援委員会の配慮により、難民認定を受けることができ、合法的に暮らせるようになる。しかも現地NGOの支援で職業訓練を受け、一流ホテルへの就職も果たす。

メキシコで夢を持って生きることを知った少年は、過去を振り返り、こう語る。

「ギャングになれば、恐れられるようになる。人々が抱く恐怖心が、ギャングになった少年たちをいい気分にさせる。多くの少年は、リスペクトされる存在になりたくて、ギャングになるんだと思う」

彼らのような若者たちに、別の生き方を見出してもらおうと奮闘するおとなたちには、信仰を糧に活動する者、NGOとして様々なプロジェクトを展開する者など、いろいろな人がいる。そして誰もが、大きなジレンマを抱え、時に無力感に襲われながらも、祖国の未来のために、暴力の闇に翻弄される子どもや若者と向き合い続けている。

それは、おとなが関わり続けることで、信頼関係を築き、対話を繰り返していけば、子どもたちに変わるチャンスをつかんでもらえると、確信しているからだ。

そんな確信を、より多くの子どもたちにとっての現実とするには、ギャングが支配する地域のおとなたちだけが、孤軍奮闘してはだめだ。そう強く感じる。私たち皆が、それぞれの場で、自分が取り組んでいる課題と世界のつながりを考え、未来のために今、何をすべきかを、世界の人たちとともに真剣に考えなければ。

1984年、私が20歳で出会ったラテンアメリカには、貧乏暮らしをしながらも、皆でそこから抜け出すぞ、という活気があった。人間同士のつながりが多くの問題を解決し、保険も蓄えもなくとも、なぜか未来に希望を抱くことのできる世界が、そこには存在した。バブルへと突き進む日本社会で私が感じていた不安や違和感から解放してくれる、人間パワーと連帯感があった。

それが徐々に薄れ、失われていき、マラスのような若者たちを生み出した原因は、ラテンアメリカだけにあるのではない。歪んだグローバル化がもたらした「現在」を様々な角度から分析し、新たな道筋を描くのは、私たち地球市民、全員の責務だろう。その責務を果たすための気づきの材料として、この本が役立つことを切に望む。

『革命の侍』映画化余話

10年前(2007年)だったのだろうか、私は当時の駐日ボリビア大使から本を1冊渡された。ラパスで2006年出版された『革命の侍』だった。エルネスト・チェ・ゲバラの部下としてボリビアで革命のゲリラ戦を戦い、1967年8月31日に処刑されたフレディ・マエムラの25年の生涯を描いたドキュメンタリードラマである。著者はフレディの姉マリー・マエムラ＝ウルタードと、その息子エクトル・ソラーレス＝マエムラ。大使は「日本語で翻訳出版したいのだが、協力してくれまいか」と持ち掛けてきたのだった。

私は、友人の鈴木武道が編集幹部だった長崎出版を訪ねた。同社は地下鉄神田神保町駅の近くにあった。嬉しいことに、辻晋泰社長は快諾してくれた。私は旧知の松枝愛を翻訳者に指名した。大学で西語を専攻した彼女は、初の翻訳に挑戦したいと応えた。かくして編集鈴木、松枝翻訳、伊高監修で作業は進み、日本語版『革命の侍—チェ・ゲバラの下で戦った日系二世フレディ前村の生涯』は2009年8月刊行された。その半年前、マリーとエクトルが出版を待ち兼ねるかのように来日、長崎出版は歓迎会を開いた。

さまざまな反響があったが、最も意外だったのは2013年のある日、映画監督・阪本順治とプロデューサーの椎井友紀子が「映画化したい」と言ってきたことだった。製作はキノフィルムズ。その日から松枝と私は必要に応じて協力することになった。特に松枝は、ラパスのエクトルとの連絡や往復文書の翻訳で多忙となった。

阪本監督らはボリビアとキューバに何度も足を運び、ついに2016年8月～10月、日玖両国で撮影が為された。松枝と私は東京での撮影現場を見学した。周辺には細長い棒を手にした青年たちが配置されていた。訊けば、蟬が鳴き出したら追い払う役の裏方だという。門外漢の私には、新鮮で面白い話だった。

監督補ロランド・アルミランテ、チェ・ゲバラ役俳優ファン・バレーロらキューバ側関係者にインタビューすることもできた。

こうして映画『エルネスト』が完成した。1967～68年に製作された故黒木和雄監督、津川雅彦主演の『キューバの恋人』以来ほぼ半世紀ぶりの日玖合作映画である。2017年2月2日、東京・五反田での最初の内輪試写会で2時間を超える作品を味わった。上映後、阪本監督とフレディ役主演オダギリジョーと個別に話したが、二人とも「映画人として記念すべき作品で、今後は〈この作品の前と後〉という考え方になる」と言っていた。オダギリの台詞はすべて西語であり、その特訓だけでも大変だったはずだ。

この映画はもちろん、フレディの死とゲバラの処刑死(1967年10月9日)の50周年に合わせて製作された。封切りと同じころ、『革命の侍』はキノブックスから新装出版される。また、ゲバラ特別写真展も催される。ゲバラ自ら撮影したものを含め、日本では未公開の写真ばかりだ。さらに、この映画製作に関連する本と、キューバ革命やゲバラについての本も同社から刊行される。ラ米や欧州でゲバラ没半世紀に因む文化的企画が目白押しで、日本にも多くの企画がある。その中心にあるのが、映画『エルネスト』だ。

本職が医師だったゲバラは、医師になるためキューバに留学しボリビア遠征に志願したフレディに目をかけ、自分の名エルネストをゲリラ名として、エル・メディコ(医師)を暗号名として与えた。一途な日系青年に何か感じるころがあったのだろう。フレディの父親は、鹿児島県出身の前村純吉で、マリーによれば、フレディは律儀で一徹な日本人の性格を父親から強く受け継いでいた。西語でかつて読んだ『赤穂浪士』にフレディを垣間見て「革命の侍」という題名に行き着いた。マリーはそう語っていた。

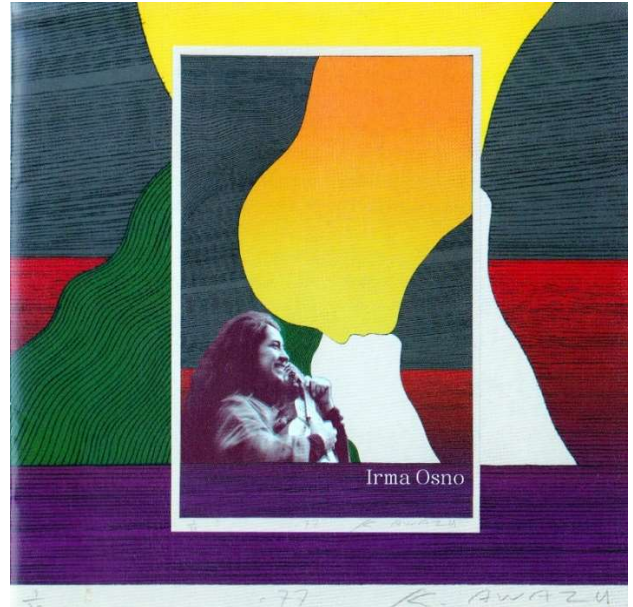
イルマ・オスノ「タキ：アヤクーチョ」を聴く

2013年に笹久保伸とともに「アヤクーチョの雨」という名盤を生み出したイルマ・オスノの素晴らしい新作ソロ・アルバムが誕生した。「タキ：アヤクーチョ」と題されたこのCDは、一般的に想像されるアンデス音楽というイメージを徹底的にぶち壊す、それでいて非常に、ほかに例えようもなくアンデス的なアルバムだ。

イルマさんはペルーの南部、アヤクーチョの中部に位置するビルカスワマン郡に生まれた。12歳までは完全なケチュア語世界で家畜を追いながら自由に育ったという。電気も水道もないアンデスの田舎の村で育つことで、その土地が持っていた歌や踊り、そしてそれらを支える宇宙観に、小さい頃より深く親しんで育った。

しかし、1980年代に入るとペルーはセンデロ・ルミノソによるテロの猛威が吹き荒れる。ビルカスワマンは、最初にセンデロが狼煙をあげた場所からほど近く、まさに隣接する郡であった。そのため、イルマさんたちは生き残るためにリマへと移住することを決意する。運良くリマではスペイン語を学び学校に行くことができ、学校の先生をしながら、音楽や踊りの活動を、リマのアヤクーチョ出身者たちとともに続けていた。そんな中、ペルーにギターを学びに来ていた笹久保伸と出会ったイルマさんは、拠点を日本の秩父に移し、日本での音楽活動を始動させた。

「私には人生設計というものはない。つねに自分の前に来た流れに自然に乗り続けた結果が今の私」と語る彼女は、それでも常にアヤクーチョという故郷、そしてその土地で育まれてきた芸能とそれを支える世界観と共に生きている。そしてそれらがるごと、日本での体験までも含めて盛り込まれたのが、この新しいアルバム「タキ：アヤクーチョ」



2017年6月発売：(IND) TDA-001, 2,500円

なのである。

彼女の歌は、日本人が想像しがちないわゆる街角に流れる「アンデス・フォルクローレ」とも、アンデスの都市部で消費される民衆音楽としてのワイノ音楽とも、根本的に異なっている。彼女が歌う音楽は、そういった都市的なものとは一線を画するアンデスの農村地域で歌われ続けてきた音楽である。これまでほとんど商業ベースに乗ることのなかった、いわゆる「民族音楽」として語られてきたジャンルの音楽が、イルマ・オスノという稀有の才能によって、新たな斬新なアプローチで、日本でこのように世に出ることとなったのである。

アルバムのタイトルにある「タキ」は、ケチュア語で「歌」という意味の言葉である。そして、それと同時にその音は日本語の「滝」という言葉にも通じている。イルマさんはCDの解説のなかでアンデスの精霊のひとつ、主に滝にいるとされる人魚に言及し、音楽家たちにインスピレーションを与え、楽器を調律してくれる精霊だと説明している。このよ

うに「滝」はアンデス世界にとっても、音楽にとって非常に重要な「場」であったことがこのことから浮かび上がってくる。

このケチュア語と日本語の2つの意味を掛け合わされた「タキ」というタイトルは、ケチュア世界を表現しつつも、日本という環境下で作りに上げられたことによる日本的アプローチがこの作品に入っていることをまさに表現している。

収録曲 11 曲のうち 9 曲は、アヤクーチョおよび隣接するワンカベリカの古い伝承曲を歌っており、そして彼女の作になる 1 曲はアヤクーチョのスタイルのカーニバルの曲を歌っている。アンデスの闘牛を扱ったワフラ・プクイでは、闘牛の開始を告げる角笛ワフラ・プクの音を模したチューバの音色に乗せて幾重にも重ねられた彼女の歌声が響き渡る。ワンカベリカのハサミ踊りの歌でも、ハサミの音色とチューバ、バイオリンなどが絶妙に光るアレンジで演奏される。

農村音楽を描き出したイルマさんのアルバムにギターは登場しない。彼女が爪弾くチンリリと呼ばれるアヤクーチョの一部地域のみで使われるローカルな小型弦楽器とチューバ、バイオリン、ケーナに打楽器類。そこにシンセサイザーと彼女の倍音を多く含む歌声が多重に重ねられて作られている。

これらの個々の楽器のアレンジは、演奏をお願いした日本人演奏家にすべて一任したと、彼女は語っている。「私が楽譜を書いてしまえば、その音楽はその奏者自身のものとはならない。なので、アンデス音楽を聴いたこともない真っ白な状態のまま、私の歌だけを聴いて、それぞれのパートを自由に作ってもらった」という。それによって、それぞれの奏者が脇役ではない、まさに対等に対峙する形でそれぞれの音楽を作り上げたかったのだと、熱く語ってくれた。

また、6 曲目に収録されている彼女のオリジナル曲「回向の水に泳ぐ子」は、秩父の小鹿野の水子供養に衝撃を受けた彼女が作った秩父の風土とアヤクーチョの世界が交錯する作品だ。プーノの前衛詩人

ガマリエル・チュラタの「黄金の魚」をケチュア語に訳したものを歌詞として借用しながら、生きられなかった水子の思いを、アヤクーチョ的なメロディラインにのせて紡いでいる。ここでは、彼女の娘クシイ・ササクボも、子どもの声で参加している。

イルマ・オスノは、この非常に伝統的でありながら同時に挑戦的な作品を、人が生きる日常の傍らにあるものについて歌ったと語る。それゆえ、非常にアヤクーチョの農村部という土地のスタイルを踏襲しつつも、深いところで力強い普遍性を持った作品であり、人が生きる上での喜び悲しみを歌い上げた作品となっていると述べている。

愛や恋といった一側面のみを語りがちな商業音楽を否定するわけではないが、人が生きている傍らにある音楽というのは、長らくそれだけではなかった。そういう人々の営み自体を歌によって語り継いできた、そういう物語を日本に生きる一人のアヤクーチョ女性の声を通してぜひ体感してほしいと思う。おそらく、あなたの世界がこれまでとは違った視点を持って立ち現れてくる、そんな契機となる作品になるのではないかと思う。



ニンジンとキャベツとホウレンソウのスープ

Sopa de Zanahoria, Maíz, Col y Espinaca

ソマリサの読者のみなさんこんにちは。紹介してきたメキシコ料理のレシピ、つくってみたいだけてますか。

これまで、豚肉や牛肉、魚介類、魚などの料理を紹介してきましたが、おもしろいのは、すべての材料が簡単に見つかることです。

メキシコは全世界の料理のために膨大な材料を提供してきました。たとえば、トウモロコシやトマト、カボチャ、数え切れないほどの種類のトウガラシ（ピーマン）、チョコレート、バニラなどがあります。

メキシコ人は数千年前から農耕をはじめ、人々の味覚を楽しませる数え切れない食材をつくりだしてきました。オルメカ人は、トウモロコシやカカオ、トウガラシ、カボチャを4000年以上前から栽培し、マヤやアステカなどの古代文明でも同様でした。

今回の料理に使うニンジンやキャベツ、ホウレンソウは、アメリカ大陸原産ではありませんが、マヤの人々は17世紀ごろから料理に使っていました。これらの野菜によってさまざまなシチューが生まれ、メキシコ料理はいつそう豊かになりました。

.....

■材料 4人分

- ・キャベツ カップ1杯
- ・ニンジン中 1本
- ・トウモロコシの缶詰 1缶 (115~120グラム)
- ・ホウレンソウ 2把
- ・塩、コショウ 適量
- ・水1リットル
- ・コンソメ 大さじ1杯



ちなみにニンジンは、北アフリカからスペインに伝わりました。スペイン人はニンジンやホウレンソウを、ローマ帝国やオスマン帝国時代から食べていました。

今回は野菜の料理です。ご家族や友達とご賞味ください。

.....

■作り方

- 1) キャベツを食べやすく細切りにする。量はスープカップ1杯分。
- 2) ニンジンの皮をむいて、1センチ角に切る。
- 3) トウモロコシの缶詰を開け、水分を切って、ザルで洗う。
- 4) ホウレンソウをスプーンで食べやすい大きさに切る。
- 5) 鍋に水と切った野菜を入れ、コンソメと塩、粉末コショウを加え、蓋をして中火にかける。
- 6) 水が足りなくなったら、適宜加える

(1) 企業的農業の食料生産貢献度の低さ

国際NGO「地球の友」によると、世界の農地の75%余りを占有する企業的農業によって生産される食料は、世界の総食料生産量の20%に過ぎないという。残り80%は、小規模な家族的農業が担っているという (Agricultura industrial vs agroecología, <http://youtu.be/xR4qyxm5yE8>)。つまり、企業的農業の面積当たりの食料生産性は、小規模農業の10分の1以下ということになる。

このデータは、国際家族農業年の2014に、世界農業機関やGrainが算出した数値である。LA地域では、約8割を占める小規模生産者の所有する農地面積は1.7億haとなっている。その比率は、総面積8.9億haの農地の19.3%に相当する。約2割の企業的農業が全農地の8割を専有していることになる。しかし、LA地域の輸出向け農作物の生産の8割は、家族農業によって担われている。

LA諸国における企業的農業による土地集積は顕著なものとなっている。チリにおいては、2千ha以上の大農場所有者の数は1997-2007年の10年で、3割増加し、大農場の平均面積は1万4千haに倍増している。土地集積がもっとも急激に進展しているのは、ブラジルのセラードやアルゼンチンのパンパスなど大豆栽培の拡張地域である。雇用能力や生産性が低く、持続可能性の低い企業的農業による土地買い占めの勢いは留まりそうもない。

大多数を占める小規模な家族農業の従事者の生活基盤を破壊する企業的農業への警鐘から提案された国際家族農業年の取り組みが、現代農業の方向を変える大きな力になるかは不明である。

主要出典：

Salomón Salcedo y Lya Guzmán eds., *Agricultura Familiar en América Latina y el Caribe: Recomendaciones de Política*, 2014.
<http://www.fao.org/docrep/019/i3788s/i3788s.pdf>

(2) 「種子は共有財産か、企業の所有物か」

日本の「主要農作物種子法」廃止と「農業競争力強化支援法」制定にみられるように、各地で農による有機的な世界の循環を断ち切り、生きられる環境を破壊するという資本による「生命の再植民地化」(バンダナ・シヴァ)が進行している。

ラテンアメリカ種子コレクティブのドキュメント『種子は共有財産か、企業の所有物か』(Radio MundoReal, 39分 <https://vimeo.com/218841301>)は、メキシコ、ホンジュラス、アルゼンチン、コロンビア、グアテマラにおけるクリオージョ(現地産)種子を防衛する運動の体験や戦いをまとめた記録である。多くの場合、種子を守り、共同体の中で継承していく役割を中心的に担うのは女性となっている。玉蜀黍の原種テオシントレ(ナワ語で「神の玉蜀黍」、日本名は豚玉蜀黍!)を守る試み、マヤの農民が行う種子に対する祝福・感謝儀礼、種子を交換する市や取引、クリオージョ種の維持・存続に向けた取り組みなどが紹介されている。

植物の新品種を育成者権という知的財産権として保護しようとする「種子法」、モンサントなどによる遺伝子組み換え作物(GMO)強制、植物の新品種の保護に関する国際条約(UPOV91)への反対運動も紹介されている。GMO栽培による大地破壊の告発、農薬散布やアグリビジネスへの抵抗なども取り上げられている。現地産種子を防衛する運動は、民族の領域、生命、自治を守る運動でもある。



(3) 再びグアテマラ難民がメキシコへ



1980年代初頭、内戦が続いていたグアテマラから4.7万人の難民がメキシコに流入したとされる。内戦終結後、2000年までに約4.2万人が本国に帰国したが、約1万人以上がメキシコ市民権を取得したとされる。しかし、現在でも、政府当局による強制退去を怖れてメキシコに避難する人も少なからずいる。

2017年6月2日、マヤ生物保護区(Reserva Biosfera Maya, RBM, 216万ha, 1989年発足)にあるラグナ・ラルガ入植地(1.5万ha, 2000年入植)の120家族が3km北の国境を越え、カンペチ州カンデラリア行政区エル・デセンガーニョに避難した。軍や国家市民警察(PNC)の強制排除から逃れるためだった。

ペテン県北部のRBMには、1980年代から各地から農民が入植していた。入植地の大部分は、RBM核心地帯(36%)ではなく、緩衝地帯(24%)や多目的利用可能地帯(40%)に分布している。当初、非核心地帯での入植活動への規制はさほど厳格ではなかった。ラグナ・デ・ティグレ国立公園周辺の36入植地で正式に入植活動を認可されたのは4カ所とされる。しかし、1997年頃から全国自然保護区審議会が規制を強化し、2005年には不法入植地の強制排除の方針を出した。一方、2010年、仏英資本の石油開発企業には15年間の活動が認められ、パイプライン沿いに入植者の侵入道路が縦横に広がっている。

2016年以降、焼畑などによるRBMでの森林火事の増大を名目に、軍やPNCを動員した違法入植地の強制排除が進展するようになった。しかし、大規模な企業的牧畜業者の活動は野放し状態である。その一部は、違法飛行場経由で運ばれる麻薬を牛耳っている麻薬組織と関係するナルコ・牧畜業とされる。

主要出典 : <http://www.bbc.com/mundo/noticias-america-latina-6539490>; <https://www.plazapublica.com.gt/content/temporada-de-desalojos-en-la-laguna-del-tigre>

(4) 先住民・アフリカ系女性の通信社発足



2017年4月、メキシコ・中米で活動する先住民・アフリカ系女性記者たちによって、先住民・アフリカ系女性通信社(Noticias de Mujeres Indígena Afrodecentes, NOTIMA)の発足総会が開催された。発足集会にはLA全域から約200名が参集した。

最初の仕事は、2017年4月24日～5月5日に、国連で開催される第16回先住民問題常設フォーラムの報道となった。NOTIMAのFacebookには、パネル(女性と子供への暴力に対する戦略、先住民女性の挑戦、センサスに先住民項目を含める措置、先住民の土地・領域防衛の戦い、文化的多様性、女性と水、LA諸機関における透明性、女性参加推進の戦略と行動、先住民族と資源など)に参加した各地の先住民代表へのインタビュー動画(20～60分)がアップされている。

また、ペルーやボリビアの女性の先住民国会議員、ビッキー・タウリ(国連先住民特別報告官)、ミルナ・カニンガム(先住民開発基金協議会副総裁)、アルバロ・ポップ(先住民問題常設フォーラム総裁)などに対する個別インタビューもある。

NOTIMIAがカバーしているのは、こうした国際集会の報告だけではない。メキシコ・タマウリパス州で中米移民の人権保護に携わってきた活動家ミリアム・ロドリゲスの殺害(5月10日)に対する抗議の声明、先住民学生への奨学金募集の告知、さらに「民族モード：危機にさらされる記憶」という記事も掲載されている。最新の記事は、中米・メキシコ先住民女性連盟、先住民女性国際フォーラム、中米女性基金などの呼び掛けによって、メキシコ・オアハカ州サクアルパンで6月末開催の「助産婦・伝統的医療従事者と環境の正義」の告知となっている。

主要出典 : <https://www.facebook.com/notimia>

先月、RECOMの総会を久しぶりに京都嵐山で行いました。この間、関西の会員の参加が中心でしたが、今年は東京からの参加もあり、今まで以上にラテンアメリカ話で盛り上がりました。普段、職場や家庭でこうした話題が主流になることは少なく、同じような関心事、自分が最近フォローできてなかったなと思うテーマについて、RECOMの仲間から刺激をもらえる場となりました。

そして、総会でRECOMのFacebookを立ち上げることを決め、早速、動き出しています。ぜひ会員の皆さんも見てください。また今年度から、長年事務局長を担当して下さった大西さんに代わり、事務局長を担当することになりました。どうぞよろしくお祈りします。

(嘉村早希子)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で、10月14日(土)
 発送作業は関西で、10月21日(土)の予定です。

参加いただける方は、recom@jca.apc.org まで連絡ください。

最近の記事

Vol. 160 サパティスタ・芸術と科学
 Vol. 159 グアテマラのアフリカ系
 Vol. 158 コロンビア・和平の陰の暴力
 Vol. 157 ニカラグア・ワスパンの今

Vol. 156 グアテマラ戦時下性暴力裁判
 Vol. 155 メキシコ・ナルコ街道ゲレロ
 Vol. 154 グアテマラ揺るがず関税汚職
 Vol. 153 コロンビアを伝える旅

メーリングリスト

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、メールアドレス、自己紹介メールを添え、recom@jca.apc.org まで、ご一報ください。メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

会員の種類

☆会員 : 年8,000円…会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆学生会員 : 年5,000円…会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆賛助会員 : 年10,000円(一口)…総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
 ☆購読会員 : 年4,000円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町20-15 太田方
 TEL 075-862-2556(留守電)

お問い合わせは、E-MAIL、手紙、もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

E-mail recom@jca.apc.org

Facebook

<https://www.facebook.com/recomsonrisa/>

郵便振替口座:00110-7-567396
 日本ラテンアメリカ協力
 ネットワーク

レコム口座 100万6267円
 グアテマラ基金 131万4806円
 (2017年1月現在)

そんりさ (SONRISA) 161号
 2017年7月15日発行
 日本ラテンアメリカ協力
 ネットワーク(RECOM)
 定価 400円